

歴史都市防災論文集 Vol. 6 (2012年7月)

【報告】

## 立命館大学ユネスコチェア「文化遺産と危機管理」国際研修

UNESCO Chair on Cultural Heritage and Risk Management,  
THE INTERNATIONAL TRAINING COURSE ON DISASTER RISK MANAGEMENT OF  
CULTURAL HERITAGE

板谷 (牛谷) 直子<sup>1</sup>・ロヒト・ジグヤス<sup>2</sup>・土岐憲三<sup>2</sup>

Naoko Itaya, Rohit Jigyasu and Kenzo Toki

<sup>1</sup>立命館大学准教授 R-GIRO 歴史都市防災研究センター (603-8341 京都市北区小松原北町58)

Associate Professor, Ritsumeikan University, Research Center for Disaster Mitigation of Urban Cultural Heritage

<sup>2</sup>立命館大学教授 R-GIRO 歴史都市防災研究センター (603-8341 京都市北区小松原北町58)

Professor, Ritsumeikan University, Research Center for Disaster Mitigation of Urban Cultural Heritage

This international training course provides the trainees efficient knowledge and skills to draft a disaster risk management plan by taking into account the values of the cultural heritage, and recognizing specific challenges for their protection, conservation and disaster risk management facing respective countries. The program brings together experts in the fields of cultural heritage conservation and disaster management who have not had the opportunity to work together before. During the course they are also expected to formulate disaster risk management plan for specific cultural heritage sites in their home countries. During last six years, 270 candidates submitted their applications, out of which 53 participants from 20 countries have attended the course. The activity has received international recognition and needs to continue in the future.

**Keywords :** UNESCO Chair, Cultural Heritage, Risk Management, International Training Course

### 1. はじめに

立命館大学歴史都市防災研究センターでは、歴史都市の文化遺産防災をテーマとしたユネスコチェア国際研修を行っている。

歴史都市には、社寺など建造物や美術工芸品、古くからの町並や庭園、そして伝統的な祭礼など、多くの文化遺産が、現代の暮らしとともに所在している。日本では、長年にわたって、文化財の保護が進められてきたが、自然災害の発生時に被害の集中する可能性が高い都市域での防災対策は十分でなかった。一方で、自然災害に対する研究や技術開発は進められてきたが、文化財や文化遺産をかけがえのない特別のものとして扱う視点が欠けていた。また、各国の歴史都市は、保持する文化遺産や背景となる文化が異なり、ひとつの基準では評価できない多様な価値を保持している。その上、自然災害や人為災害に対する構造特性や都市計画など物理的脆弱性、日常維持管理などに関わる経済的脆弱性、伝統的社会や現代の政治制度における社会的脆弱性など、それぞれの脆弱性に起因する課題を抱えている。ユネスコチェア「文化遺産と危機管理」国際研修は、各国それぞれの歴史都市の価値と課題を認識しつつ、文化遺産防災対策を推進する人材の育成を目指している。本報告は、2006年度から継続して2011年度までに6回開催し、今後も継続しようとする、立命館大学ユネスコチェア「文化遺産と危機管理」国際研修の、これまでの開催の経緯と内容を記録し、その意義と課題を明らかにしようとするものである。

## 2. 文化遺産防災概念の確立

わが国では、1995年の兵庫県南部地震による地震後の同時多発火災を契機として、文化遺産防災の概念が提示され、その重要性和意義とが国の内外において次第に理解されるようになってきた。2003年度には「災害から文化遺産と地域を守る検討委員会」が内閣府により設置され、2008年度には「重要文化財建造物の総合防災対策検討会」が組織された。ここでの議論を通じて、文化遺産の防災問題の重要性が政府により認識され、法律により自治体に義務づけられている防災計画において、文化遺産防災についての記述の必要性が明確に示された<sup>1)</sup>。歴史都市防災研究センター長が、上記の両委員会では委員長を務め、「文化財防災学の創始者」として内閣総理大臣表彰を受けたのは、2006年であるから、文化遺産防災概念の確立は、この頃とすることができるであろう。その後、国と京都市との協働により、上記委員会において行われたケーススタディが、3000トンの貯水を擁し、清水寺から八坂神社に至る東山山麓防災水利システムとして、5年の事実かけてを整備され、2011年に完成している。ちなみに、立命館大学で歴史都市防災研究センターが設立されたのは2003年8月であり、その活動がこの事業にも大きく貢献した。文化遺産防災をめぐるこの分野での一連の動きの中で、大変早い取り組みであったといえよう。

## 3. 関係国際機関の反応

文化遺産保護分野と防災分野の間に横たわる深い谷間の問題は日本に限ったことではなかった。2003年、ユネスコ（UNESCO：国際連合教育科学文化機関）のパリ本部と、イクロム（ICCROM：文化遺産国際協力センター）のローマ本部において、歴史都市防災研究センター長が、文化遺産防災の重要性について講じた。文化遺産側と防災側が目を向けるべき文化遺産防災という視点は、ユネスコやイクロムでさえも関係者の耳目を集めるものであった。これが契機となり、立命館大学にユネスコチェアが付与された。

ユネスコチェアとは、先進国の高等教育研究の成果を途上国等に還元するために、ユネスコ本部が展開する世界的なプログラムである。2011年現在、世界には715のユネスコチェアプログラムがあり、日本にはそのうちの4つがある（埼玉大学、広島大学、立命館大学歴史都市防災研究センター、岡山大学）<sup>2)</sup>。

世界のユネスコチェアプログラムのうち、文化遺産防災をテーマにした研修は、立命館大学のもののみである。すなわち、本国際研修は、世界で唯一の文化遺産防災研修プログラムといえる。

## 4. 立命館大学ユネスコチェア「文化遺産と危機管理」国際研修

### (1) 国際研修の開始

2005年1月に神戸市で開催された国連本部による防災世界会議での文化遺産防災をテーマとするテーマ別会合「ユネスコ・イクロム・文化庁－文化遺産危機管理」での討議と勧告<sup>3)</sup>、同年12月にイクロムのユッカ・ヨキレット氏を招聘して国際研修のあり方について討議した「世界遺産保護国際セミナー」を経て、2006年からユネスコチェア「文化遺産と危機管理」国際研修が開始された。

国連防災世界会議での文化遺産防災をテーマとするセッションは、ユネスコ・イクロム・文化庁が主催して開催し、立命館大学歴史都市防災研究センターが事務局をつとめた。防災に関わる国際会議において、文化遺産のテーマが討議されたのは、はじめてのことである。

### (2) 研修者の選出

研修者は、ユネスコなど関係国際機関を通じて公募し、イクロムとともに優秀な人材を選出している。応募者数は、6か年で270名、応募国数は延べ117か国にのぼる。東日本大震災の発生した2011年では減少したが、応募者数は増加傾向にある（表1）。本国際研修では、これまでに、東アジア地域（インドネシア・韓国・中国・フィリピン）南アジア地域（インド・パキスタン・バングラディシュ・ネパール・ブータン）中東地域（イラン・トルコ）アフリカ地域（ケニア・ウガンダ）中南米地域（ペルー・ジャマイカ・コロンビア・メキシコ）大洋州地域（パラオ）欧州地域（セルビア・モルドバ）の20か国から53名の研修者を招聘している。とくに、6回目の2011年には、アフリカからの研修者を初めて招聘することができた。各研修者の所属は、国および地方の行政官が57%を占め、大学教員等が32%で次いでいる。他は、関連NPO等である（表2）。

表1 過年度の応募者数および研修者数

|          | 2006年度 | 2007年度 | 2008年度 | 2009年度 | 2010年度 | 2011年度 | 計          |
|----------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|------------|
| 応募者数(国数) | 8(4)   | 33(13) | 32(11) | 61(28) | 79(31) | 57(30) | 270(延べ117) |
| 研修者数(国数) | 8(4)   | 8(4)   | 9(5)   | 8(4)   | 11(5)  | 9(8)   | 53(延べ30)   |

表2 過年度の研修者

(\*:ユネスコ世界文化遺産)

| 年度   | 姓            | 所属       | 国       | 文化遺産危機管理計画対象地         |
|------|--------------|----------|---------|-----------------------|
| 2006 | KODELIRA     | 文化庁      | インド     | *デリーのクトゥブ・ミナールとその建造物群 |
|      | KARANTH      | UNDP     |         |                       |
|      | SEKTIADI     | ガジヤマダ大学  | インドネシア  | *ブランバナン寺院遺跡群          |
|      | AYUATI       | 文化観光局    |         |                       |
|      | QURESHI      | 国立芸術大学   | パキスタン   | *ロータス城塞               |
|      | KHADIM       | 地方開発局    |         |                       |
|      | JEONG        | 文化財庁     | 韓国      | *安東河回村                |
|      | SHIN         | 朝鮮科学技術大学 |         |                       |
| 2007 | MONOWAR      | 内務省      | バングラデシュ | 歴史都市ダッカ               |
|      | ALAM         | 島嶼部開発局   |         |                       |
|      | Shijun HE    | 遺産管理局    | 中国      | *麗江旧市街                |
|      | Cuiyu HE     | 遺産管理局    |         |                       |
|      | CORRALES     | 文化財研究所   | ペルー     | *リマ歴史地区               |
|      | GIBU         | 地震工学研究所  |         |                       |
|      | CONCEPCION   | ビガン市役所   | フィリピン   | *古都ビガン                |
|      | QUADRA       | 設計事務所    |         |                       |
| 2008 | WEISE        | 都市計画事務所  | ネパール    | *カトマンズの谷              |
|      | RAJBHANDARI  | ネパール工科大学 |         |                       |
|      | FILIPOVIC    | 文化財研究所   | セルビア    | ベオグラード要塞              |
|      | DORJI        | 内務省文化局   |         |                       |
|      | TENZIN       | ゾン管理局    | ブータン    | タシチョゾン                |
|      | NEJATI       | バム復興計画   |         |                       |
|      | SARADJ       | イラン工科大学  | イラン     | *バムとその文化的景観           |
|      | CHIOU        | 国立ユン林大学  |         |                       |
| 2009 | CHIEH        | 中央政策大学   | 台湾      | サント・ドミンゴ城と周辺地域        |
|      | YU           | 文華大学     |         |                       |
|      | DING         | 同済大学     | 中国      | *青城山と都江堰水利(灌漑)施設      |
|      | THAPALIYA    | 文化庁      |         |                       |
|      | SHRESTHA     | 文化庁      | ネパール    | *カトマンズの谷              |
|      | BROWN        | 危機管理局    |         |                       |
|      | BROOKS       | 遺産トラスト   | ジャマイカ   | ポートロイヤルシティ            |
|      | CIOCANU      | 文化財研究所   |         |                       |
| 2010 | SURUCEANU    | 国立美術館    | モルドバ    | 国立美術館の建造物と美術工芸品       |
|      | TSHERING     | 文化庁      |         |                       |
|      | MUKAI        | 文化庁      | ブータン    | ウォンディフォダンゾン           |
|      | DWIGHT       | 文化庁      |         |                       |
|      | NGIRMANG     | 国立登録局    | パラオ     | バイ(伝統的な木造集会所)         |
|      | HUAPAYA      | 聖心大学     |         |                       |
|      | SHIMADA      | 立命館大学    | ペルー     | *クスコ市                 |
|      | DIAZ         | 聖心大学     |         |                       |
| 2011 | GROZDANIC    | 文化財研究所   | セルビア    | ベオグラード コサンチチェヴ・ヴェナツ地区 |
|      | MARKOVIC     | 文化財研究所   |         |                       |
|      | GUL UNAL     | ユルドズ工科大  | トルコ     | エスキゲディズ遺産地区           |
|      | VATAN KAPTAN | ユルドズ工科大  |         |                       |
|      | RINCON       | 文化庁      | コロンビア   | *サンタ・クルーズ・デ・モンボスの歴史地区 |
|      | NICHOLAS     | 危機管理局    |         |                       |
|      | PEREZ OCEJO  | アメリカ大学   | ジャマイカ   | ホーリートリニティ大聖堂          |
|      | MWAHUNGA     | 文化庁      |         |                       |
| 2012 | KIGONGO      | サイトマネジャー | メキシコ    | *プエブラ歴史地区             |
|      | SHARMA       | 文化庁      |         |                       |
|      | SHIKDER      | 地域開発局    | ケニヤ     | *ラム旧市街のラム博物館          |
|      | QING         | 文化庁      |         |                       |
|      | WANG         | 文化庁      | ウガンダ    | *カスビのブガンダ王国歴代国王の墓     |
|      | SHARMA       | 文化庁      |         |                       |
|      | SHIKDER      | 地域開発局    | インド     | *タージ・マハル              |
|      | QING         | THAD     |         |                       |
| 2013 | WANG         | NTNU     | 中国      | 福建省廈門市コロンス島           |
|      | WANG         | NTNU     |         |                       |

### (3) 研修の概要

研修者は、講義を受けるのみならず、清水寺や仁和寺などの社寺で研修を行い、産寧坂などの重要伝統的建造物群保存地区およびその周辺地域などでワークショップを行ってきた。研修は、京都だけでなく、篠山伝統的建造物群保存地区、神戸市等で行った。とくに、2009年度は前半を京都、後半をネパール国カトマンズにて開催した。また、東日本大震災のあった2011年度は、京都市消防局が被災直後に救援活動を行った宮城県南三陸町に行き、被災の実態を研修した（表3）。

そして研修の最後は、それぞれの国々や地域の多様性や固有性を踏まえた文化遺産防災計画の作成を演習として行ってきた。これまでに、タージ・マハル、古都ビガン、リマ歴史地区などをはじめとする、世界遺産に登録された歴史都市の文化遺産防災計画を立案した（表2）。

本国際研修は、時間表の一例として表4に示すように、2週間の集中的な研修を行っている。2週間という日数は、優秀な人材が職場を離れて海外で研修を受けることが許されるであろう最大の期間長であるが、あまりにも密度の濃い研修であるため、研修後のフォローアップアンケートでは、得ることの豊富さとともに、期間の延長を求める声が多く聞かれる。

表3 過年度の国際研修研修地および同時開催会議等

| 年度   | 研修地                        | 同時開催の国際会議等   |
|------|----------------------------|--|
| 2006 | 京都市内、姫路城、篠山伝統的建造物群保存地区、神戸市 | ・コンソーシアム京都にて「文化遺産防災国際フォーラム」を開催。ジョバンニ・ボッカルディ氏（ユネスコ世界遺産センター）らを招聘。  |
| 2007 | 京都市内、美山町                   | ・清水寺にて、文化庁第5回国際文化フォーラム 土岐座長座談会「文化遺産と地震」に参加。ジョバンニ・ボッカルディ氏、ジョセフ・キング氏（イクロム）らを招聘。  |
| 2008 | 京都市内、奈良、東京                 | ・グランヴィア京都にて「文化遺産防災国際フォーラム2008」を開催<br>・国連大学 ウ・タントホールにて、歴史まちづくり法施行記念国際シンポジウム「地震帯にある世界文化遺産の危機管理をどう進めるか」を開催。マリエル・リション氏（ユネスコ）らを招聘。  |
| 2009 | 京都市内、ネパール国カトマンズ、パタン        | ・歴史都市防災研究センターにて、国際専門家会議「地震帯における世界文化遺産の持続可能な保護」を開催。ジョバンニ・ボッカルディ氏、ジョルジョ・クローチ氏（ローマサピエンサ大学教授）、グスタヴォ・アローズ氏（イコモス会長）、ミカエル・ターナー氏（世界遺産委員会イスラエル代表）、らを招聘。<br>・ネパール国カトマンズにて、カトマンズ・フォーラム「持続可能な文化遺産危機管理のための保存と開発」を開催。ユネスコカトマンズオフィスと共催。ジョセフ・キング氏らを招聘。 |
| 2010 | 京都市内、篠山伝統的建造物群保存地区、神戸市     | ・歴史都市防災研究センターにて、ICOMOS-ICORP 会議、国際シンポジウム「文化遺産を災害からどう守るか：防災と災害復旧」を開催。グスタヴォ・アローズ氏（イコモス会長）らを招聘。   |
| 2011 | 京都市内、宮城県南三陸町               |  |

## 5. 評価

### (1) 国際研修における外部評価

本国際研修は、2006～2007年度は立命館大学21世紀COEプログラム「文化遺産を核とした歴史都市の防災研究拠点」、2008～2011年度は立命館大学グローバルCOEプログラム「歴史都市を守る『文化遺産防災学』推進拠点」の活動の一環として行っている。2007年11月、当該プログラムの外部評価が行われた。評価は、濱田政則（早稲田大学教授：委員長）、室崎益輝（消防庁消防研究所所長：当時）、北原糸子（神奈川大学：当時）、Giovanni BOCCARDI（UNESCO）、Joseph KING（ICCRUM）の集団討議によって取りまとめられた。本国際研修は、自然科学から人文・社会科学に及ぶ学問分野での展開に加え、文化形成の歴史という時間軸の広がり、世界各地での実践という空間的広がりを有する研究領域において、ユネスコ、イクロムなどの国際機関との連携により、国際的な人材育成が国際研修を通じて進んでいること、また、国際的な研修システムの開発がなされていることについて高い評価を受けた。しかしながら、参加枠が少なく研修の期間も短いこと、今後の継続と、研修後のフォローアップが課題として上げられた。



表 4

## UNESCO Chair on Cultural Heritage and Risk Management

|                  | 9/10 (Sat)   | 9/11 (Sun)  | 9/12 (Mon)                 | 9/13 (Tue)                  | 9/14 (Wed)                  | 9/15 (Thu)                                 | 9/16 (Fri)                         | 9/17 (Sat)               | 9/18 (Sun) | 9/19 (Monday)     | 9/20 (Tue)                      | 9/21 (Wed)                          | 9/22 (Thu)           | 9/23 (Fri/Holiday)   | 9/24 (Sat) |
|------------------|--------------|-------------|----------------------------|-----------------------------|-----------------------------|--|------------------------------------|--------------------------|------------|-------------------|---------------------------------|-------------------------------------|----------------------|----------------------|------------|
| THEME            | INTRODUCTION | Site-seeing | Risk Analysis (site level) | Risk Analysis (urban level) | Risk Analysis (urban level) | FIRE PREVENTION AND EMERGENCY PREPAREDNESS | Mitigation (earthquake and floods) | Risk Assessment Scenario | SS         | Recovery Planning | the Great East Japan Earthquake | Policy for Risk Management/DRM Plan | FORMULATING DRM PLAN | FORMULATING DRM PLAN | Open Jury  |
| 1 <sup>st</sup>  | JIGYASU      | YAMASAKI    | JIGYASU                    | OKUBO                       | OKUBO                       | JIGYASU                                    | IZUNO                              | JIGYASU                  | DMUOH      | DMUOH             | Muralami                        | TANIGUCHI                           | OKUBO                | JIGYASU              | JIGYASU    |
| 2 <sup>nd</sup>  | JIGYASU      | DMUOH       | DMUOH                      | DMUOH                       | DMUOH                       | DMUOH                                      | DMUOH                              | DMUOH                    | DMUOH      | DMUOH             | DMUOH                           | DMUOH                               | DMUOH                | DMUOH                | DMUOH      |
| 3 <sup>rd</sup>  | JIGYASU      | DMUOH       | DMUOH                      | DMUOH                       | DMUOH                       | DMUOH                                      | DMUOH                              | DMUOH                    | DMUOH      | DMUOH             | DMUOH                           | DMUOH                               | DMUOH                | DMUOH                | DMUOH      |
| 4 <sup>th</sup>  | JIGYASU      | DMUOH       | DMUOH                      | DMUOH                       | DMUOH                       | DMUOH                                      | DMUOH                              | DMUOH                    | DMUOH      | DMUOH             | DMUOH                           | DMUOH                               | DMUOH                | DMUOH                | DMUOH      |
| 5 <sup>th</sup>  | JIGYASU      | DMUOH       | DMUOH                      | DMUOH                       | DMUOH                       | DMUOH                                      | DMUOH                              | DMUOH                    | DMUOH      | DMUOH             | DMUOH                           | DMUOH                               | DMUOH                | DMUOH                | DMUOH      |
| 6 <sup>th</sup>  | JIGYASU      | DMUOH       | DMUOH                      | DMUOH                       | DMUOH                       | DMUOH                                      | DMUOH                              | DMUOH                    | DMUOH      | DMUOH             | DMUOH                           | DMUOH                               | DMUOH                | DMUOH                | DMUOH      |
| 7 <sup>th</sup>  | JIGYASU      | DMUOH       | DMUOH                      | DMUOH                       | DMUOH                       | DMUOH                                      | DMUOH                              | DMUOH                    | DMUOH      | DMUOH             | DMUOH                           | DMUOH                               | DMUOH                | DMUOH                | DMUOH      |
| 8 <sup>th</sup>  | JIGYASU      | DMUOH       | DMUOH                      | DMUOH                       | DMUOH                       | DMUOH                                      | DMUOH                              | DMUOH                    | DMUOH      | DMUOH             | DMUOH                           | DMUOH                               | DMUOH                | DMUOH                | DMUOH      |
| 9 <sup>th</sup>  | JIGYASU      | DMUOH       | DMUOH                      | DMUOH                       | DMUOH                       | DMUOH                                      | DMUOH                              | DMUOH                    | DMUOH      | DMUOH             | DMUOH                           | DMUOH                               | DMUOH                | DMUOH                | DMUOH      |
| 10 <sup>th</sup> | JIGYASU      | DMUOH       | DMUOH                      | DMUOH                       | DMUOH                       | DMUOH                                      | DMUOH                              | DMUOH                    | DMUOH      | DMUOH             | DMUOH                           | DMUOH                               | DMUOH                | DMUOH                | DMUOH      |
| 11 <sup>th</sup> | JIGYASU      | DMUOH       | DMUOH                      | DMUOH                       | DMUOH                       | DMUOH                                      | DMUOH                              | DMUOH                    | DMUOH      | DMUOH             | DMUOH                           | DMUOH                               | DMUOH                | DMUOH                | DMUOH      |
| 12 <sup>th</sup> | JIGYASU      | DMUOH       | DMUOH                      | DMUOH                       | DMUOH                       | DMUOH                                      | DMUOH                              | DMUOH                    | DMUOH      | DMUOH             | DMUOH                           | DMUOH                               | DMUOH                | DMUOH                | DMUOH      |
| 13 <sup>th</sup> | JIGYASU      | DMUOH       | DMUOH                      | DMUOH                       | DMUOH                       | DMUOH                                      | DMUOH                              | DMUOH                    | DMUOH      | DMUOH             | DMUOH                           | DMUOH                               | DMUOH                | DMUOH                | DMUOH      |
| 14 <sup>th</sup> | JIGYASU      | DMUOH       | DMUOH                      | DMUOH                       | DMUOH                       | DMUOH                                      | DMUOH                              | DMUOH                    | DMUOH      | DMUOH             | DMUOH                           | DMUOH                               | DMUOH                | DMUOH                | DMUOH      |
| 15 <sup>th</sup> | JIGYASU      | DMUOH       | DMUOH                      | DMUOH                       | DMUOH                       | DMUOH                                      | DMUOH                              | DMUOH                    | DMUOH      | DMUOH             | DMUOH                           | DMUOH                               | DMUOH                | DMUOH                | DMUOH      |
| 16 <sup>th</sup> | JIGYASU      | DMUOH       | DMUOH                      | DMUOH                       | DMUOH                       | DMUOH                                      | DMUOH                              | DMUOH                    | DMUOH      | DMUOH             | DMUOH                           | DMUOH                               | DMUOH                | DMUOH                | DMUOH      |
| 17 <sup>th</sup> | JIGYASU      | DMUOH       | DMUOH                      | DMUOH                       | DMUOH                       | DMUOH                                      | DMUOH                              | DMUOH                    | DMUOH      | DMUOH             | DMUOH                           | DMUOH                               | DMUOH                | DMUOH                | DMUOH      |
| 18 <sup>th</sup> | JIGYASU      | DMUOH       | DMUOH                      | DMUOH                       | DMUOH                       | DMUOH                                      | DMUOH                              | DMUOH                    | DMUOH      | DMUOH             | DMUOH                           | DMUOH                               | DMUOH                | DMUOH                | DMUOH      |
| 19 <sup>th</sup> | JIGYASU      | DMUOH       | DMUOH                      | DMUOH                       | DMUOH                       | DMUOH                                      | DMUOH                              | DMUOH                    | DMUOH      | DMUOH             | DMUOH                           | DMUOH                               | DMUOH                | DMUOH                | DMUOH      |
| 20 <sup>th</sup> | JIGYASU      | DMUOH       | DMUOH                      | DMUOH                       | DMUOH                       | DMUOH                                      | DMUOH                              | DMUOH                    | DMUOH      | DMUOH             | DMUOH                           | DMUOH                               | DMUOH                | DMUOH                | DMUOH      |
| 21 <sup>st</sup> | JIGYASU      | DMUOH       | DMUOH                      | DMUOH                       | DMUOH                       | DMUOH                                      | DMUOH                              | DMUOH                    | DMUOH      | DMUOH             | DMUOH                           | DMUOH                               | DMUOH                | DMUOH                | DMUOH      |
| 22 <sup>nd</sup> | JIGYASU      | DMUOH       | DMUOH                      | DMUOH                       | DMUOH                       | DMUOH                                      | DMUOH                              | DMUOH                    | DMUOH      | DMUOH             | DMUOH                           | DMUOH                               | DMUOH                | DMUOH                | DMUOH      |
| 23 <sup>rd</sup> | JIGYASU      | DMUOH       | DMUOH                      | DMUOH                       | DMUOH                       | DMUOH                                      | DMUOH                              | DMUOH                    | DMUOH      | DMUOH             | DMUOH                           | DMUOH                               | DMUOH                | DMUOH                | DMUOH      |
| 24 <sup>th</sup> | JIGYASU      | DMUOH       | DMUOH                      | DMUOH                       | DMUOH                       | DMUOH                                      | DMUOH                              | DMUOH                    | DMUOH      | DMUOH             | DMUOH                           | DMUOH                               | DMUOH                | DMUOH                | DMUOH      |
| 25 <sup>th</sup> | JIGYASU      | DMUOH       | DMUOH                      | DMUOH                       | DMUOH                       | DMUOH                                      | DMUOH                              | DMUOH                    | DMUOH      | DMUOH             | DMUOH                           | DMUOH                               | DMUOH                | DMUOH                | DMUOH      |
| 26 <sup>th</sup> | JIGYASU      | DMUOH       | DMUOH                      | DMUOH                       | DMUOH                       | DMUOH                                      | DMUOH                              | DMUOH                    | DMUOH      | DMUOH             | DMUOH                           | DMUOH                               | DMUOH                | DMUOH                | DMUOH      |
| 27 <sup>th</sup> | JIGYASU      | DMUOH       | DMUOH                      | DMUOH                       | DMUOH                       | DMUOH                                      | DMUOH                              | DMUOH                    | DMUOH      | DMUOH             | DMUOH                           | DMUOH                               | DMUOH                | DMUOH                | DMUOH      |
| 28 <sup>th</sup> | JIGYASU      | DMUOH       | DMUOH                      | DMUOH                       | DMUOH                       | DMUOH                                      | DMUOH                              | DMUOH                    | DMUOH      | DMUOH             | DMUOH                           | DMUOH                               | DMUOH                | DMUOH                | DMUOH      |
| 29 <sup>th</sup> | JIGYASU      | DMUOH       | DMUOH                      | DMUOH                       | DMUOH                       | DMUOH                                      | DMUOH                              | DMUOH                    | DMUOH      | DMUOH             | DMUOH                           | DMUOH                               | DMUOH                | DMUOH                | DMUOH      |
| 30 <sup>th</sup> | JIGYASU      | DMUOH       | DMUOH                      | DMUOH                       | DMUOH                       | DMUOH                                      | DMUOH                              | DMUOH                    | DMUOH      | DMUOH             | DMUOH                           | DMUOH                               | DMUOH                | DMUOH                | DMUOH      |
| 31 <sup>st</sup> | JIGYASU      | DMUOH       | DMUOH                      | DMUOH                       | DMUOH                       | DMUOH                                      | DMUOH                              | DMUOH                    | DMUOH      | DMUOH             | DMUOH                           | DMUOH                               | DMUOH                | DMUOH                | DMUOH      |

Organized by Research Center for Disaster Risk Mitigation of Urban Cultural Heritage, Ritsumeikan University, Kyoto, Japan

## (2) ユネスコの災害リスク低減プログラムと当国際研修

ユネスコでは、2008年から「世界遺産の災害リスクの低減（Reducing Disasters Risks at World Heritage Properties）」のプログラムを開始している。目標は、①リスク低減に関係する広域の、あるいは、国や地方のサポートの強化、②文化遺産防災教育の推進および人材育成、③リスク評価と監視、④潜在的リスク要因の低減、⑤事前準備、緊急時対応、復旧復興のすべてのレベルでの対策強化、である。このプログラムの一環に、パートナー機関とともに開催するテクニカル・ワークショップがある。これらのワークショップの一つとして、下記のリストのように、立命館大学ユネスコチェア「文化遺産と危機管理」国際研修は位置づけられている。

- Special Thematic Session on Risk Management for Cultural Heritage (UN World Conference on Disaster Reduction, Kobe, Japan, 2005)
- Integrating Traditional Knowledge Systems and Concern for Cultural and Natural Heritage into Risk Management Strategies (International Disaster Reduction Conference, Davos, Switzerland, 2006)
- **The International Training Course on Disaster Risk Management of Cultural Heritage (Ritsumeikan University, Japan, 2006-)**
- Workshop Risk Reduction for Caribbean Heritage (Havana, Cuba, 2008)
- International Conference on "Earth Wind Water Fire - Environmental Challenges to Urban World Heritage" (Regensburg, Germany, 2008)
- International Workshop on Disaster Risk Management at World Heritage Properties (Olympia, Greece, 2008)
- Second International Workshop on Disaster Risk Reduction to Cultural Heritage, Acre (Israel), 14-17 November 2009
- Capacity-Building Workshop on Assessment of Vulnerability of Cultural and Natural World Heritage Properties to Disasters and Climate Change (Beijing, 6-12 December 2009)

## (3) ICOMOS-ICORP（イコモス 文化遺産防災国際学術委員会）委員長の輩出

本国際研修のユネスコチェア教授には、ロヒト・ジグヤス立命館大学教授がその任にあつたっている。氏は、当該分野での一連の活動が評価され、2009年10月に開催されたイコモス諮問委員会において、ICOMOS-ICORP（イコモス文化遺産防災国際学術委員会）の委員長に選出された。

また、2011年11月に開催されたイコモス総会では、イコモス執行委員会の執行委員に選出された。イコモス（ICOMOS：国際記念物遺跡会議）とは、文化遺産保護に関わる国際的な非政府組織で、ユネスコの諮問機関として、世界遺産登録の審査およびモニタリングにあつたっている国際機関である。ロヒト・ジグヤス教授は、世界75か国のイコモス会員による選挙で、3位の得票数を得て選出された。これは、文化遺産防災に対する国際的な関心の高まりと当該分野における本学の活動への高い評価を示すものといえよう。

## 1. おわりに

立命館大学ユネスコチェア「文化遺産と危機管理」国際研修は、文化遺産防災概念の確立とともに、世界に先駆けて開始された当該分野で唯一の研修である。6か年にわたって各国の世界遺産等を対象に文化遺産危機管理計画の策定を通して人材育成に取り組んできた。研修者は、各国の文化遺産保存及び防災の専門家であり、当国際研修は、文化遺産防災教育および国際貢献において、国内外の高い評価を得ている。とはいえ、招聘できる人数は財政的に限られている。課題は、文化遺産防災を学びたい人材に知識を届けるツールと、トレーナーの確保であろう。具体的には、前者は教科書の作成であり、後者は研修修了者のネットワークがあげられる。この課題解決に向け、2012年度には教科書（Trainers Guide）の作成を目指している。最後に、立命館大学がGCOEを通して醸成してきた文化遺産防災研修を、国際社会における文化遺産の災害防止に資するためにも、継続推進することを強く望まれるところである。

## 参考文献

1) 重要文化財建造物及びその周辺地域の総合防災対策のあり方：

[http://www.bunka.go.jp/bunkazai/bosai/sougou/pdf/sougoubousai\\_h2104.pdf](http://www.bunka.go.jp/bunkazai/bosai/sougou/pdf/sougoubousai_h2104.pdf)

2) University Twinning and Networking：<http://www.unesco.org/en/unitwin/university-twinning-and-networking/>

3) 兵庫行動枠組：<http://www.bousai.go.jp/wcdr/index.html>